飛下りさま、眞甲微塵と斬付けてくる早業に、千馬が息の根も止つたかと思ひ
や、いつか身を交して横に拂つた一刀、今度は團右衛門の身體が二つになつたと
怪しまれましたが、清水もさるもの、ヒラリと飛退いて大刀を青眼に構へてゐま
す。三郎兵衛も油斷はせず、ヂリ〳〵と近寄つてまゐります。それを見ると團右
衛門、

『無禮者めが、覺悟しろ！』

と許りに斬込んで來ました。その太刀先を三郎兵衛が「何を」とばかり受け、そ
れからは互に虛々實々、火の出るやうな大活劇を演じてゐました。と、それを見
たのが茅野和助です。小癪な敵奴がと思ふとどん〳〵と駈寄つて來て猛烈に團右
衛門に斬りかけてまゐりました。けれども團右衛門は少しも萎みません。兩人を
相手にして益々〳〵奮鬪してゐます。さすがの三郎兵衛和助の兩人も、一人の敵を討

取ることが出來ずに居りました。

そこへ駈込んで來たのが前原伊助と間新六とでした。

『いざ御兩所、新手が入り替らう』

といふなり無二無三に斬り込んでまゐります。

かうなつてはさすがの團右衛門も運の盡きです。彼れいかに武藝に達してゐる
とは申せ鬼神ではありません。四人の敵に攻立てられて數ケ所の傷手を受け、だ
ん〳〵と後退りをして行つて、今は意氣も沮喪して太刀先が亂れるところを、エ
イと許りに討込まれた切尖に何條堪らう筈がありません。その場に倒れて敢なき
最後を遂げました。

四一、蠟燭は無いかと

今は早や、表裏兩門から亂入した義士の面々によつて、吉良の屋敷は蜂の巣を突いたやうな大騒動になつてしまひました。義士の面々は今こそ日頃の本望を達するのだと思ひますから、勇氣は日頃に百倍して、愈々猛り狂ふて居りました。けれども一番困つたのは家中に闖入した人々でした、庭前ならばとにかく月の明りにでも幽かに人影は見えますが、燈火一つ無いお家の中では誠に困つたことです。殊に案内知らぬ屋敷の中では非常に困難なことでした。

此れではならぬと考へましたのが裏門組の磯貝十郎左衛門でした。一つ何とか燈火の用意をしようと考へましたから、一人つか〳〵と臺所の方へ入つて來ました。すると、或る一室にボンヤリと有明がついてゐます。これ幸ひと障子を蹴破つて室内に飛込んで見ますと、何者か知れぬがたしかに一人の男が布團を頭から冠つたまゝガタ〳〵と震えてゐる様子。

十郎左衛門は物も言はずに布團を引剝して見ると、五十ばかりの賤しい老人がキョロ〳〵として手を合せるのです。

『其方は何者だ！』

『ハイ、あの、どうか生命ばかりは……』

『イヤ、我々は決して無用の殺生はせぬ。手向ひせぬものゝ生命はとらぬ。その方は何者だ！』

『ハイ、私はお料理の手傳ひの者で……どうぞ一命だけはお助けを……』

『えゝ！　よく生命々々といふ奴ぢや。其の方蠟燭の所在を存じて居らう。どこにある、隠し立てをすると爲めにならんぞ』

『ハイ〳〵、蠟燭ならあそこに御座ります。どうぞ勝手にお取り下され、……

……私はモウ腰が立ちませんだア……』

老人の指さす押入をあけゝ、澤山の蠟燭がありました。十郎左衛門は大層喜びまして、『これさへ手に入れば安全だ』とばかり、澤山の蠟燭に火を點して、部屋々々に立てゝ歩きました。これは實に突蹉の間に考へられたことで、而も味方にとつては百萬の援兵の來たよりも、もつと心強いことでありました。吉良の身内にとつては非常に困つたことであつた丈け、義士の活動には此の上もない便宜を與へた、十郎左衛門の大きな手柄であつたのです。

四二、もぬけの殼

激戰數刻、最早や吉良邸は義士の占領する所となつて、手向ふ敵もなくなりました。けれども目指す上野介の姿は見えません。義士の面々は一刻も早く、不倶

戴天の敵を仕止めたいと、血眼になつて上野介の居間を探して廻りました。

裏門組の一人大石瀨左衛門は今年とつて二十六歳の若武者でしたが、上野やあると奥の間指して斬込んでまゐりますと、ある壁際に人間らしい影がうろ〳〵してゐます。これ幸ひ、此奴を脅して上野の居間に案内させやうと思ひましたから、突然それに飛かゝつて、襟元をぐつと引摑み、

『これ！　上野の居間は何れぢや。大人しく案内いたせ、左も無ければ貴樣の首は無いぞ！』

と嚇しますと、案外に意氣地がない奴と見えて、へな〳〵と萎れ、

『どうぞ生命許りはお助け下されい。決して手向ひなどはいたしません』

『然らば尋常に案内いたせ』

『某は併し臺所に詰るもので、御居間のことは存じませぬが……』

『エイ、此處に詰る汝が上野の居間を知らぬとは何事、さういふものなら覺悟をいたせ』

と云つて、瀨左衛門が突付けた白刄に駭いた憶病侍、わな〳〵震えながら、

『どうぞ生命許りは……ハイ、御案内を仕ります』

『然らば早速案内せい』

瀨左衛門は此の男に案内されてとう〳〵上野介の居間の前までまゐりました。見ると、外からチャンと壺金が下してあつて、誰れ一人打入つた樣子がありません。やれ嬉しやこれで一年有半辛苦をなめた効果があつて、今宵主君の仇に一番槍がつけられるかと思ふと驚喜して壺金を外し、外から唐紙を蹴倒して飛込みましたら、これはどうしたことか、有明の圓行燈に照らされて絹布の蒲團がとられてはあるが、中はもぬけの殼で、上野介は居りません。

『南無三、逃げ居つたか』と暫らく其處に立つてゐますと、

『大石氏、敵は早くも逃げ出したと見えるな』

と云つて入つてきたのは菅谷半之丞でした。

二人は暫らく其處に立つてゐましたが、何思つたか瀨左衛門はツカ〳〵と上野の床に近より、蒲團に手を入れて、

『菅谷氏、上野はまだ遠くは落伸びぬぞ。見られよまだ殘つてゐる此の溫み』

『あゝ左樣か。然らばまだ其の邊に』

『その通り。いざ其のあたりを探し申さう』

と二人は居間を立出でました。

四三、合圖の呼子

思ひは同じ他の面々も、上野はどこにあるかと探してまわりました。けれども、吉良の姿は皆目わかりません。臺所の隅から厠の中まで、屋敷中は勿論お庭の隅々までも探したのですが、どうしても上野介は居らないのです。

弱り果てた義士の人たちは、庭の一隅に立つて無念の齒を喰ひしばりました。

『これ程探してゐないとすれば、何れへか逃出し居つたに違ひない』

『實に殘念なことをしたものである』

と云つて、張り詰めた元氣もどうやら緩んだやうになりました。

全軍の統帥をして八方に目を配つてゐた大石内藏助、此の有樣を見ると早速吉田忠左衛門を呼んで、あの人々の元氣を落さすなと命じました。忠左衛門は宙を飛んで此場に駈付けるや、大音聲をあげて、

『やあ〳〵言甲斐なき人々。上野介が邸内に潛み居ることは確實ぢや。まだ夜

も明け放れぬに其の樣な悲觀は無用、疾く〳〵探索を致されぬか！』

と勵ましました。それに力を得た人々は、落しかけた元氣を再び盛返して、彼方此方と尋ねまわりました。

もう夜はほの〴〵と明け初めて居りました。曉の冷い風が、忠義に凝つた義士たちの袖を拂つて吹きました。忠左衛門は裏手の搜索をしてゐました。臺所を見たが人影がありません。湯殿の中を窺ひましたが眞暗で物音一つしません。そこを通つて土間のあたりを探しましたが、猫の子一つ居る樣子がありません。足音を偸んで物置らしい建物の前に立つて聽耳を立てましたが、元より此んな所に人の居らう筈もありません。

『さて上野奴はどこへ逃げ居つたらう。モ一度臺所の方を吟味しよう』

と思つて其處を立去らうとした時、不思議や物置の中からガサリといふ物音！

さては？　と息を殺して聞いてゐると、たしかに中でひそ〳〵話してゐるのは人の聲。忠左衛門は高聲をあげて、

『やあ〳〵御出會ひなされ、此の中に怪しい人聲がある！』　と申しました。

それをきくと義士の數人がバラ〳〵と駈け寄つてまゐりました。

『此の中でござるか！』　といふなり、大力の三村次郎左衛門が斧を揮つて表戸を滅茶々々に打破りました。

『ソレ踏込め！』　と云つてるところへ、ヒューと中から飛んで來たのは茶碗礫、續いて鉢や皿などが投出され、しまひには槇木炭までも飛んで出ます。

『敵は袋の鼠である。礫にあたつて怪我するな』　と、義士たちは暫らく中に入ることを見合せてゐましたが、その中に、投出すものが無くなつた樣子。

『ソレ、此の間に進め！』　と云つて、血氣の勇士が飛込まうとすると、

『己れ痩浪人が？』　といふなり飛出して來たのは上杉家の附人の一人清水一學。決死の勇を奮つて斬つてかゝりました。三村次郎左衛門が「何を小癪な」と斬結びましたが一學は名だゝる上杉の勇士、容易に討取ることが出來ません。そこで赤垣源藏・潮田又之丞の兩人が手を貸してとう〳〵其處に仕止めました。

その時、又も闇の中から飛出した大須賀治郎右衛門、これも上杉家の附人の勇士でしたが、堀部安兵衛の豪勇に、これは難なく仕止められ、その又あとから飛出してきた柳原平右衛門は、前後左右から斬出す義士たちの刄にかゝつて敢ない最後を遂げました。

後はないかと窺ひますと、モウ出て來るものもありません。けれども、何だか人間らしいものが坐つてゐるやうにも思へます。それと見たのが間十次郎、手に持つ槍を取直すとヅカ〳〵と入り込んでエイと突けば、たしかに手耐へがしてウ

ーンといふ。武林唯七がすかさず飛込んで一刀を浴せると、其のまゝ横に仆れて別に手向ひもいたしません。「ソレ引出せ」と兩人が物置の外へ引出しました。見ると白無垢の小袖を着た尋常ならぬ老人です。

『貴殿は何者であるか』と云つて尋ねましたが答へません。二度三度と問返しても石のやうに默つてゐます。忠左衛門は倩々その顏魂を眺めて、

『イヤ、年配といひ衣服の樣といひ、これは確に上野介殿に相違あるまい。ソレ合圖！』

と云ふと、呼子の笛がピリ〳〵と鳴り響きました。その音が、次から次へと吹き續かれると、ぞろ〳〵義士たちが集つてまゐりました。

四四、義士の本懷

大石内藏助も呼子の笛に喜んで、さては本望が達せられたかと來て見ますと、そこに引据ゑられた老敵は、確かに上野介に相違ないと睨みました。そこでヅカ〳〵と其の前に進み出て、そこに跪づき、

『拙者事は故淺野内匠頭の家來、今浪人の大石内藏助と申すもの、貴殿は吉良上野介殿と見奉るが如何でござらう。尋常にお名乘り下されい』

と叮嚀に尋ねましたが、何とも答へません。そこで、内藏助は人々に指圖して老人の身體を調べさせました。すると肩先きに一の字の古傷があります。

『あつた〳〵、これこそ故殿が怨みの太刀痕！』

『上野介に定つた』

と云つて驚喜しました。中には嬉し涙を流してゐるものもあります。内藏助はきつとなり、

『上野介殿、これ程の證據がある以上、男らしくお名乘りなされて切腹せられよ。首級を頂きたうござる』

と申しましたがそれでも吉良は默つて居ります。内藏助も愈々呆れてしまひ、

『然らば、御免！』　といふなり紫電一閃、短刀の束も通れと上野介の胸元に突立てる、

『十次郎殿、貴殿が一番槍の殊勳ぢや。早く首級をあげられい』

と命じましたが、十次郎は他人を憚つてためらつて居ります。そこで内藏助も他の人も、

「遠慮召さるな。それが順ぢや」
と勧めましたので、十次郎も決心して、
「各々、御免！」と云つて立上るや、上野介の首は脆くも地に落ちてゐました。

四五、泉岳寺指して

臥薪嘗膽二十と二ヶ月、有ゆる艱苦を忍んで、とう〳〵目ざす上野の首級をあげた四十七士の心中はどんなでしたらう。感極つた人々は、多くを語らず唯だ嬉し涙を泛べて立つて居りました。吉良の當主義周はどこへ隠れたか其の行方さへ分りませんでしたが、今となつてはもうそれを探し出す必要もありません。此の上は引上げるばかりです。

合圖の銅鑼がボーン〳〵と續いて鳴り響きました。

『それ引上げだ！』

と云つて義士の面々は裏門に集つてまゐりました。

堀部安兵衛が一味の名前書を取出し、一々人名を呼上げて見ますと、四十七人そつくり揃つてゐます。而も横川勘平が薄手を負うた外は二三人が少々の擦過傷を受けた位、別に負傷者といふ程のものさへ無かつたのは、何たる仕合せのよかつたことでせう。内藏助は改めて義士の人たちに吉良邸内を見廻らせて火の用心を見させました。若し引上げの後から火事でも起つて近隣を燒くやうなことがあつたなら、世間に對して申譯がないと考へたからでした。けれども、邸内には少しも火の心配はありません。

愈々引上げといふ間際になると、義士の一人早水藤左衛門は、大音揚げて呼はりました。

『やあ〳〵、吉良殿家中の方々、赤穗の浪人只今上野介殿を討取つて立退き申す。無念と存ずる方々は出合ひなされ』

けれども吉良の邸内は閑として聲なく、長屋住居の侍たちも、一人として出合ふものがありません。そこで、義士の面々は悠々と裏門を出發しました。

それは午前六時頃のことでしたから、もう人の顔がほの〴〵と分るころになりました。一同は門外に出て一と休みしましたが、その時には皆んな本望の成就した喜びに打たれてどの顔もどの顔も大ニコ〳〵の有様でした。其の時大高源吾が一句、

山を拔く力もをれて松の雪

と詠んだ俳句には一同聲を揃へて褒めそやしました。

さて内藏助の考へでは、自分たちが上野の首を取つたなら、吉良の後ろには上杉といふ大々名がついてゐることであるから、必ず時を移さず上杉家の軍勢が押寄せてくるに相違ない。其の時は、先づ兩國回向院に據つて最後の奮戰を試みようと定めて居りました。そこで、吉良の裏門を出た義士の面々は、そのまゝ回向院まで引上げてまゐりました。

門の扉をドン〳〵叩き、「我々は赤穗の浪士であるが」と尋常に名乘りをあげて、暫時寺内で休息させて貰ひたいと賴みました。ところが、回向院ではさういふ人たちを寺内に入れて、他日どんな、お咎めでも蒙つては大變だと考へましたので、門を堅く締めてそれを斷りました。血氣に逸る義士の中には、左までに物の分らぬ坊主共なら、叩き破つて入つてやらうといきまくものもありましたが、内藏助はそれを押へて、一同門前に立つて上杉勢や來ると待構へました。

けれども、上杉勢も吉良の家臣も、一人として追つて來るものがありません。そこで内藏助は泉岳寺に引上げることにいたしました。

丁度十五日は大小名が登城の日になつて居りました。それ故表通りを引上げたなら、本所から高輪へ出るまでには、多くの大名行列に出會はねばなりません。それが恐いわけではありませんが、一々面倒なことに逢つて徒に時間を費すことゝなりますから、わざと裏道を選んで菩提寺に向ふことにしました。

義士の行列は先づ第一に鞘を拂つた槍を持つたものが二人、それに續いて五人の勇士が袖に包んだ上野介の首級を槍の柄につけたのを護衛して行く。その後を打つのが總大將の内藏助、その次ぎが手負ひや老人、殿を打つのはいづれも豪勇の人々。

行列は市民環視の裡に回向院前から一ッ目通りを深川に出で、お船藏後通りか

ら隅田川岸を傳はつて永代橋の上まで出ました。黎明のすが〳〵しい朝風が越中島の彼方から吹いて來て、心から復讐の朝らしい氣がするのでした。

永代橋を渡つて靈岸島、それから築地鐵砲洲へきたときには、行列はわざ〳〵舊淺野邸へ迂廻してまゐりました。義士の人たちは、暫らく其の門前に足を停めて立ち盡しましたが、誰れの目にも懷舊の涙が熱するのでした。

『これが見納めと申すものですなあ』

『イヤ、過去を想へば總べてが夢でござる』

『いかにもその通りでござる』

かう云つて語合ふ人々の眼中には、今の前まで極度に燃え立つてゐた勇猛心に變つて、いつの間にか美くしい忠愛の心が、子供らしい若芽となつて伸びてゐるのでした

やがて再び行列は動き出して、日比谷から愛宕下から、泉岳寺さして進んで行きました。

四六、自訴

此處は芝愛宕下にある大目付仙石伯耆守の役宅であります。十五日の朝まだ早いことで、役人らしい者の姿も見えません。二三人の下役どもが役机などを整理してゐるばかり。雪に白い庭上には、餌をあさる小雀の寒さうな姿が、チ、チと鳴くその聲のやうに小さく見える許り。愛宕の山から二三羽の烏が芝山内の方へ飛んで行きます。

『オヤ？』 といつて下役の一人が門前の方を見ました。相手の下役たちも手

を休めて、

『何ぜ？　あれは』

『物騒な奴ぢやな。此の太平の世の中にあの扮装は？　アレ、抜身の槍を擔いとるぞ。呑、門前へ、槍を置いて……やッ、此方へ來をるぞ』

三人の下役どもが話してゐるその玄關先きへ、討入のまゝの裝束をした二人の義士が、ツカ〳〵とやつてまゐりました。さうして、下役人を見ると一禮して、

『お頼み申す』

『どうれ』　と鹿爪らしい聲を出した下役が其處へ出て見ました。

『これは、何れからのお越しぢや』

『我々は播州赤穗の浪士、吉田忠左衞門に富森助右衞門と申す者でござります。昨夜同士四十七人と共に本所松坂町吉良上野介邸に討入り、主君内匠頭の讐

上野介の首級を頂戴して、只今高輪泉岳寺に引揚げました。けれども、我々は公儀の御法度を勝手に破つた罪人でござります故、尋常のお裁きを仰ぎたいと存じ、兩人使者の役に立つて參上いたしました儀にござります。宜しく伯耆守樣にお取次ぎ下されたい』

と吉田忠左衞門が、丁度立板に水を流すが如くスラ〳〵と申上げました。下役人どもはそれを聽いてスッカリ感心してしまひました。

『あゝ、左樣でござるか。暫らく……暫らくお待ち下さい』

下役はあわてゝ奥へ飛込んで、重役の所へ行つて其の事を申上げました。重役も一大事だといふので早速伯耆守樣の御居間に參上し、その敷居際に手をついて、

『恐れながら大變な自訴人でござります』

と申上ると、伯耆守樣は大目付らしい目付をなさつてお尋ねになりました。

「なに？　早朝から自訴人と申すか。何者ぢや」
『左樣にござります。只今、玄關先きにまゐりました兩人の者、昨夜播州赤穗の浪士四十七人、吉良上野介の首級をとつて主君淺野公の讐を討つたにより、公儀のお裁きに與りたいとの訴へにござります。いかゞ取計らひませうか……』
『呑、赤穗の浪士が？　吉良を討取つたと申すか。おゝ出來した！　イヤ、それは容易ならざる大變事ぢや。予が直々に逢うてとらせる。廣間へ通せ。これ、粗忽の扱ひをするではないぞ。直ぐ通せ』
『委細承知仕りました』
重役が出て行くと、伯耆守樣はスグ立つてお召替へになりました。繼上下をお着けになり、佩刀を提げて廣間へお出ましになりますと、そこにはモウ吉田・富

森の兩人が案内されて來て居りました。二人とも極めて落着き拂つたもので、これが昨夜本所の松坂町で、生死の間に奮闘して來た人であるとは迚も思へない程でした。兩人は伯耆守がお出ましになると、そこへ平身低頭をいたしました。その間に伯耆守樣が御着座になつて、お言葉が下りました。
『兩人、頭をあげい。苦しうない。赤穗浪人吉田・富森と申すか』
『御意の通りにございます』
『昨夜吉良上野介邸に討入つて上野の首級を擧げたる由、それに相違ないか』
『御意の如くにござります。既に仇討本望を遂げましたる上からは、一同惜からぬ生命を長らふる心は毛頭ございませぬ。潔く亡君の墓前に割腹の覺悟ではございましたなれど、たとへ主君の仇とは申せ、天下のお膝下に於いて高家の歴々を討取つたる振舞ひ、公儀に對し奉つて恐入つたる次第故、尋常

に御裁斷を仰ぎ奉らんため、兩人を以て自訴いたしましたる次第にござります。委細の事は此の口上書によつて御賢察願はしうございます』

と云ひつゝ目くばせしますと、富森助右衛門が懷中から口上書を取出して、侍臣の手まで差上ますと、侍臣から伯耆守樣お手許に差出されました。伯耆守樣は早速手に取り上げてそれをお讀みになり、默つて一々點頭いて居られる樣子です。兩人も默つて居れば侍臣の人たちも口一つきゝません。外の方でがやゞゝと騷ぐ人の聲がして、「やつた〳〵」といふやうな景氣のいゝ聲が聞えてきます。伯耆守樣は讀み終られて、

『委細相分つた。……して、討入の人數はこれ丈けであるか』

『御意の如くにござります』

『して、此の人々は悉く泉岳寺に控えて居らるゝか』

『仰せの如く、たゞの一人も離散いたさず。公儀よりの御沙汰を相待つて居りまする』

『今後離散の憂はあるまいの』

『元よりのことにござります。我々一同の生命は赤穗撤退の其の折から、亡君のために捧げたることにござります』

『それは神妙の至である。これより登城いたし、委曲言上してまゐるであらう。それまでは悠々休息いたすが宜しからう』

と云つて伯耆守樣がお立ちにならうとなさいました。それを見ると、吉田忠左衛門が急いでそれを支へ、

『恐れながらお願ひでございます』

『何事である』

『御懇切なる御意有りがたき仕合せに存じまする。然るに泉岳寺の同志の者、御沙汰の程を鶴首して待ち居らうと存じますにより、何卒兩人の中一人だけにお暇を賜りたうござりまするが……』

とお願いたしましたが、伯耆守はそれをお許しになりません。

『イヤ、予が退出まで兩人とも待たれよ。尙ほ相尋ねたい儀がある。暫らくの間ぢや』

と云つて立たれました。兩人はそこに平伏いたしました。

伯耆守さまは靜々とお廊下にお立ちなさいました。が、暫らく行くと立止つて家來の衆を顧みられ、

『アイヤ、兩人とも空腹であらう。湯漬なりと參らせよ』

と仰有つて、やがて御登城になりました。

吉田・富森の兩人は、そこで悠りと休息し、湯漬の馳走に與りなどして伯耆守様の下城をお待ちして居つたのでした。

四七、泉岳寺墓前

四十七士が主家の菩提院である芝高輪泉岳寺に入つたのは、丁度午前の八時頃でした。異樣の裝束をした四十餘人の人々が、槍薙刀から半弓までも携へて、正々堂々と進んでくる後から、何百人といふ彌次馬が口々に何か喚きながらついてくる樣は、實に何とも形容の出來ない凄いものでした。一行が泉岳寺の門前にまゐりましたとき、それを見た使僧たちは何事が起つたのかと吃驚しました。

内藏助は、うろたへ廻る僧の一人に向つて、

『我々共は故淺野内匠頭の家來共であるが、昨夜本所松坂町の吉良上野介殿邸に討入り、其の首級を申受けて參りました。ついては一同主君の御墓前にそれを供へて尊靈を慰めたいと思ひます故、入門の程を仕職まで申入れて頂きたい』

と叮重に申込みました。

『暫らくお待ち下されませ』　と云つて坊主は寺内に入りました。

やがてすると、則天といふ役僧が出てまゐり、叮嚀に會釋をして、

『どうぞ御入り下されませ。只今承れば段々と忠義の趣き、感激の外ございませぬ。諸士御參拜の間は山門を閉して他人の出入を止めまする』

『イヤ千萬恭なうございまする』

と云つて一同は寺内に入り、傍らの清水で上野の首級を洗ひ、各々口をすゝぎ手

を清めて、亡君の墓前に跪坐いたしました。

上野介の首級は三寶にのせられて墓前に供へられました。内藏助は身を起して墓前に進み、生ける主君に仕ふる如く叮重に禮拜した後で、短刀を懷中から取出すとスラリ鞘を拂ひ、柄をお墓の方に切先を首級の方に向けて供へました。去年三月十四日の御無念さ、今こそ晴させ給へといふ意味です。殊に此の短刀こそは亡君が無念の最後を遂げるとき、お用ゐなされたのを内藏助に形身として賜はつたものでしたから、並みゐる人たちは殊更強い感慨に打たれるのでした。滿場寂として一語を發するものもありません。たゞ墓畔の松風が悲痛な曲を奏でるばかり、暫らく祈念してゐた内藏助は再びッと立上り、短刀をとつて上野の白髮首を打ち、三度までそれをすると元の座に復り、

『間十次郎殿、御燒香あれ』と申しました。

『イヤ、御遠慮には及ばぬ。御身は昨夜の一番槍、亡君の思召に適うたものでござる。御燒香召されい』

それが濟むと『武林唯七殿、御燒香！』と二番太刀の功名を表はされました。

かくて四十餘人の燒香も濟み、寺僧の厚意でお粥や酒などの馳走を戴き、此處に暫時の休息をして、公儀の御沙汰を待つことになりました。外では大變な騷ぎで、山門のまわりにたかつた黑山のやうな見物人が、押すな〳〵と犇めきながら、赤穗浪人の樣子を覗きまわつて居りました。

四八、四家へお預け

大目附仙石伯耆守が御登城になり、吉田・富森兩人から自訴の趣を報告いたしますと、府内は俄かに大騷ぎとなりました。そこへ、泉岳寺からの訴へを待つて寺社奉行の阿部飛彈守が登城される。急のお召が老中から若年寄に下つて、その人たちが急いで登城をする。お目付の役人が吉良の邸へ實地檢分に出るといふやうなわけで、それは〳〵大變な騷ぎでした。

義士復讐の事は、全部が判然としてから將軍家に言上されました。綱吉公は始終の有樣をお聞及びになり、深く御感動なされました。

『浪士どもは長い辛勞を嘗めたであらうの』

と情け深いお言葉さへありました。老中たちが大略事情を申上げますと、「好き樣に計らへよ」との仰せでございました。

役人たちは將軍家のお言葉を帶して協議をいたしました。その結果、これは仲〳〵一朝一夕に裁斷すべき事ではない、十分に詮議しなければならない事件である

から、一と先づ義士は四家の大名にお預けするといふことになりまして、十五日の夜次のやうにそれ〴〵引渡されました。

一、細川越中守綱利（肥後熊本城主）へ十七人

大石内蔵之助　吉田忠左衛門
原惣右衛門　片岡源五右衛門
間瀬久太夫　小野寺十内
間喜兵衛　磯貝十郎左衛門
堀部彌兵衛　近松勘六
富森助右衛門　潮田又之丞
早水藤左衛門　赤垣源蔵
奥田孫太夫　矢田五郎左衛門

大石瀬左衛門

二、久松隱岐守定直（伊豫松山城主）へ十人

大石主税　堀部安兵衛
中村勘助　菅谷半之丞
不破數右衛門　千馬三郎兵衛
木村岡右衛門　岡野金右衛門
貝賀彌左衛門　大高源吾

三、毛利甲斐守綱元（長門長府城主）へ十人

岡島八十右衛門　吉田澤右衛門
武林唯七　倉橋傳助
村松喜兵衛　杉野十平次

勝田新左衛門　前原伊助
間新六　小野寺幸右衛門

四、水野監物忠之（三河岡崎城主）へ九人

間十次郎　奥田貞右衛門
矢頭衛門七　村松三太夫
間瀬孫九郎　萱野和助
神崎與五郎
三村次郎左衛門　横川勘平

（註）寺坂吉右衛門は大石の命によつて南部坂や但馬豊岡の方へ報告のため出てしまつたのです。それで四十七人が四十六人となつたわけであります。

義士を預つた四家の大名は、それ〴〵丁重に扱ひましたが、殊に細川家ではこ

れをお家の名譽であるといふので、丸でお客様でももてなすやうに大切になさいました。それに次いでは水野家で、これは小身ではありましたが、なか〳〵優待いたしました。それに比べては久松・毛利の兩家ではそれ程でありません。そこで或る人がこんな狂歌を歌つたと申します。

『細川や水野流れは清けれど只大かい（甲斐）のおき（隱岐）ぞ濁れる』

四九、義士の處刑

四家にお預けになつた良雄以下四十七士の處刑については、色々の議論がありました。けれども、大體の考へは、四十七士の忠節に感服して、何とかしてかゝる稀代の忠臣義士を助けてやりたいといふ同情者が多かつたのであります。

將軍綱吉公も太く義士たちに御同情なさいまして、出來ることなら何とかして赦してあげたいと考へました。けれども、當時國民が勝手に徒黨を組んで、而も人を殺すなどゝいふことは重い罪であると、綱吉自身がお定めになつた『武家法度』の中にあることですから、自分で定めたものを自分で破ることは出來ません。どうしたら義士たちの生命を助けることが出來ようかと考へました。

ところが考へて見ると、それには一つの仕方がある。それは何であるかといふと、當時の名僧から義士の生命乞ひをさせることであります。若し當時の名僧知識から、「どうぞ四十七士の生命は佛に免じて許してあげて下さい」と頼みがあれば、實に赦し難き大罪人であるけれども、それでは貴僧に免じて赦して遣はさうと云ふことにしても、將軍家は自分で定めた大法を自分で破つたといふ世間の非難を受けないでも濟む。イヤ此れは一番の名案だ、かうして義士たちの生命を

助けてやらうとお考へになりました。

綱吉公は、それにしては誰れから生命乞ひをさせるのがよからうとお考へになりましたが、それには當時日光の御門主公辨法親王さま、此のお方から生命乞ひをして頂くのが一番よいと思召されました。けれども、將軍家御自身からかういふ次第故あなたから私に生命乞ひをして下されとも頼まれません。そこで將軍家は知らぬことにして大奥(將軍の奥方)から法親王さまにお願ひして、將軍家へ生命乞ひをして下さるやうにとお頼みになりました。

併し、法親王さまからは何とも御返事がありませんでした。

その中に、或る日法親王さまが御登城になられました。將軍家は元より大奥からの御依頼を御存じにならないことにしてありましたから、正面から何も仰有ることが出來ません。フとしたお話の序に、

『イヤ、世に政治をとる身ほど心苦しいものはござらぬ。内匠が家臣のことはお聞及ばれたことでござりませうが、實にその忠烈義心感ずるに餘りある者ども。何とかして助命して遣さうとは存じまするが、どうも大法を枉げることも出來ず……』

と云つて、「あなたから生命乞ひをして下さい」　と云はぬばかりの謎をおかけになりました。けれども、法親王さまはその謎は少しも解けないやうな御様子をなされて、

『誠に御苦心のほどお察し申上げまする……』

と仰有つたゞけでお下城になりました。

法親王さまが御下りになりますと、直ぐ大奥から使者が立ちました。使者は上野寛永寺のお宿所に出まして、

『先度お願ひいたしました赤穂浪士助命のことは、何卒お早くなさつて下さいまするやう、大奥からのお願でござります』

と申入れました。

法親王さまはそれをお聽きになり、さて使の者に向つて、生命乞ひのことはするともしないともお答へがなく、

『いや、私は先程將軍家から親しく生命乞ひをせよといふ謎をかけられましたが、あれ位苦しい思ひをしたことはござらぬ。將軍家の御胸中を察すれば此上なく同情はいたしますが、殊に法體の身としては他人より先きに先づ私の心は動く。けれども、四十餘人の人々の中には未だ血氣の定らぬ者どもゝある。後日、その人々に間違ひでも起つたなら、却つてその者どもの爲めにもならぬ。此處が彌陀の大慈悲と仰せられた所だと、涙を呑んで王法に從ふ

のがあの人たちの爲めだと、たゞ眼を閉つて退りましたことだ」

と述懐なされ、他のお話に紛らしてしまはれました。

使の者が立歸つて、此のことを復命いたしましたので、これで綱吉公にも取付く島が無くなられました。殊に法親王の仰有ることも一面の眞理ですから、愈々御決心をなされて、四十七士に切腹を仰付けられることになつたのでした。

五〇、内藏助の最後

四家へお預けになつた義士たちは、公儀の御沙汰を待ちわびて其の年も暮れ、お預けの身を以て新らしい年も迎へました。去年のお正月は怨みを呑んだ同志の者が、四方に散つて思ひ〳〵のお正月を祝つたのですが、今年はかうして他家へ

お預けの身を以てそれを迎へます。その運命の不思議さに、誰れの心も怪しく動くのでした。それでも、今年の正月は大望を達した後でしたから、それだけは心強いことでした。

細川家にお預けになつた内藏助は、當家の人たちの懇切な待遇を感謝しながらも、靜かに裁決の下る日を待つて居りました。當時内藏助らの義擧は、普く天下に傳はつて、世間の素晴らしい評判となつて居りました。そこで、細川家の人々も、折さへあれば義士たちに逢つて、そのお話などを聞きました。

「各々方の忠烈義心には驚き入る。末代まで武士道の華でござる」

と云つて、誰れも彼れも褒めそやしました。けれども内藏助たち義士の人々は、同じやうにそれを遮りました。

「いや〳〵、何もお褒めに預るやうなことは少しもございませぬ。たゞ臣下と

して盡すべきことを盡したまでゞござります」

と云つて、多くは口をつぐんで居りました。それを聞く人々は、それ丈けに一層義士の心事を美しく感ずるのでした。

さうかうする間に一月も終へて、春淺き如月の日となりました。

此の間に義士處刑の事もだん〳〵と評議されまして、その四日には遂に切腹を命ぜられることになりました。そこで、四家の方へは内々此の事が御沙汰になつたのであります。勿論、義士の面々に通ぜられてはありませんでしたが、誰れいふとなく今日が最後だといふことが囁かれたのであります。

それといふのは、四家の各々、その日には平常よりも叮嚀な御取持ちがせられたことでも分ります。殊に、お晝食の濟みましてから一同の人たちに浴湯を使はれるやうにとお言葉のあつたのでも、愈々今日が最後であるといふことが分らな

いでは居ませんでした。

大石内藏助は食事も終り沐浴も濟みましてから、靜に同志の者と物語をして居ますところへ、御家來の人から呼ばれました。さうして近く上使の入來あるべきことを傳へられました。それを承ると、内藏助は恭しく威儀を整へて、

『委細畏つてござりまする。我々一同、世にも不思議なる御緣にて御當家にお預けの身の上となり、御家中一統の御厚情に與りましたこと、生々代々忘却は仕りませぬ。何卒御前體宜しくお取りなしの程を願上げ奉ります』

とお禮を述べました。

午後になると、御目付荒木十右衞門に御使番の久永内記の兩使が、上使としてまゐりました。それから内藏助初め一同の義士をお呼出しになりまして、「今回徒黨を組んで吉良邸に討入り、私に上野介を討取つたことは、公儀を恐れざる振

舞、重々不屈だによつて切腹を仰付る」といふことを申渡されました。義士一同はそれを有難くお請いたしました。

上使の兩人は、そのあとで、吉良左兵衛義周は父を討れた節不屈の廉があつたにより、知行を召上げられて諏訪安藝守にお預けになつてゐるぞとお知らせになりました。それを聞いた内藏助たちは非常に喜びまして、

『よき事を伺ひました。それが何よりの冥途へのお土産でござりまする』

と云つて互に喜合ひました。

それから細川家で折角待へて下さいました座席に移された義士たちは、少しも惡びれる者はなく、一人々々立つて美しい最後を急ぎました。その中に大石内藏助の番がきて、今將に幽明境を別にしやうとしました時、内藏助は

あらたのし思ひは晴るゝ身はすつる

浮世の月にかゝる雲なし

と辭世の歌を詠んで、それから白閃腹に立つかと見る間に、早くも首は前に落ちて居りました。

他の三家にお預けになつてゐた義士たちも此の夕總べて同じやうに立派な最後を遂げたのであります。さうして、四十六人が生前の遺志を容れられ、泉岳寺内淺野長矩公の墓側に埋葬されることになりました。その時から星霜を閲する百餘年、今尚ほ泉岳寺畔木立滋き所には、義士主從の墓石が列つて、日夜香煙の絶えないものがあるのであります。

赤穗義士

——終——

大正拾四年四月參拾日印刷
大正拾四年五月二十日發行

英傑傳叢書

赤穗義士

著作權所有

定價金壹圓五十錢

著者　遠藤早泉

發行者　子供の日本社代表者　大谷忠治郎　東京市神田區錦町一ノ一九

印刷者　出雲寶太郎　東京市神田區竹川小路一ノ三

發行所　子供の日本社　東京市神田區錦町一ノ一九

發賣所　文行社　東京市神田區錦町一ノ一九

◁一誠館印刷所▷

興味と教育に一致點を得た兒童家庭文庫
我子に安心して讀ませられて爲になる
トテモ面白くて子供のすきな英雄豪傑傳

國史談 美英傑傳双書

友納友次郎先生監修

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
須崎國武先生著	赤名乙麿先生著	遠藤早泉先生著	佐野敏一先生著	額田六福先生著	下田佐重先生著
八幡太郎と鎮西八郎	賴朝と義經	楠公父子	日蓮と親鸞	信長と秀吉	加藤清正と石田三成

四六版・各篇二百四十頁・挿畫數葉・三色版口繪入
函入美裝 各冊 定價金壹圓五十錢 書留送料十八錢

興味と教育に一致點を得た兒童家庭文庫
我子に安心して讀ませられて爲になる
トテモ面白くて子供のすきな英雄豪傑傳

國史談 美英傑傳双書

友納友次郎先生監修

(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)
望月紫峯先生著	白鳥千代三先生著	遠藤早泉先生著	田中貢太郎先生著	菅田悅雄先生著	小川周助先生著
山田長政と錢屋五兵衛	柳生但馬と宮本武藏	赤穗義士	大塩平八郎と佐倉宗五郎	水戸烈公と井伊直弼	維新の三傑

四六版・各篇二百四十頁・挿畫數葉・三色版口繪入
函入美裝 各冊 定價金壹圓五十錢 書留送料十八錢

◇興味と教育に一致點を得た兒童家庭文庫◇
◇子供に安心して讀ませられて爲になる◇
◇トテモ面白くて子供のすきな戰の色々◇

少年文庫 戰物語

友納友次郎先生監修

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
額田六福先生著	大野政虎先生著	大倉桃郎先生著	稲垣國三郎先生著	額田六福先生著	筑紫二郎先生著	望月紫峯先生著
蒙古襲來	川中島と賤ヶ嶽	朝鮮征伐	關ヶ原合戰	大阪冬の陣と夏の陣	彰義隊と白虎隊	日清日露の戰役

四六版・各篇貳百四十頁・挿畫數葉・三色版口繪入
錢八十料送留書　錢十五圓壹金價定　册各　裝美入函

◇興味と教育に一致點を得た女子家庭文庫◇
◇子供に安心して讀ませられて爲になる◇
◇トテモ面白くて子供のすきな女傑傳◇

國史談 美女傑傳双書

友納友次郎先生監修

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
赤名乙麿先生著	須崎國武先生著	大倉桃郎先生著	大野政虎先生著	吉田助治先生著	吉田悅雄先生著
神功皇后と光明皇后	紫式部と清少納言	靜御前と巴御前	尼將軍と淀君	春日局と乳人政岡	野村望東尼と村岡局

四六版・各篇貳百四十頁・挿畫數葉・三色版口繪入
錢八十料送留書　錢十五圓壹金價定　册各　裝美入函

◇興味と教育に一致點を得た課外家庭文庫◇
◇子供に安心して讀ませられて爲になる◇
◇話おの史國なきすの供子てく白面モテト◇

少年文庫 談美史歴

友納友次郎先生監修

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
田中貢太郎先生著	湯淺眞生先生著	大野政虎先生著	稻垣國三郎先生著	田中貢太郎先生著	遠藤早泉先生著
古事記時代	奈良の都	藤の下蔭	白旗と赤旗	北條九代	吉野の吹雪

四六版・各篇貳百四十頁・挿畫數葉・三色版口繪入
◆國入美裝 各冊 定價金壹圓五十錢 書留送料十八錢◆

◇興味と教育に一致點を得た課外家庭文庫◇
◇子供に安心して讀ませられて爲になる◇
◇話おの史國なきすの供子てく白面モテト◇

少年文庫 談美史歴

友納友次郎先生監修

(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)
頼田六彌先生著	猪平猪太郎先生著	村松梢風先生著	吉田助治先生著	村松梢風先生著	白鳥千代三先生著
足利十三代	群雄割據	桃山御殿	德川三百年	維新前後	明治大正

四六版・各篇貳百四十頁・挿畫數葉・三色版口繪入
◆國入美裝 各冊 定價金壹圓五十錢 書留送料十八錢◆

◇庫文外課童兒た得を點致一に育教と味興◇
◇るなに爲てれらせ讀てし心安に供子◇
◇語物本讀なきすの供子てく白面モテト◇

友納友次郎先生著

少年文庫 語物本讀

◇ 的の味興と憬憧と拜崇の童兒 ◇

(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)
クレオと黑馬物語	南洲・海舟・眞淵・宣長	孔明・文天祥・韓信・張良	リンカーン・ウエリントン・ピット	鐵眼・信淵・良澤・玄白	ニュートン・エヂソン・ダーウイン・メンデル

◇兒童の訓育に重きをおき興味に據つて兒童の◇
◇神精向上を計り全保を得られるは本叢書である◇

四六版・各篇貳百六十頁・挿畫數葉・三色版口繪入
錢八十料送留書　錢十七圓壹金價定　冊各　裝美入綴

◇庫文外課童兒た得を點致一に育教と味興◇
◇るなに爲てれらせ讀てし心安に供子◇
◇語物本讀なきすの供子てく白面モテト◇

友納友次郎先生著

少年文庫 語物本讀

◇ 的の味興と憬憧と拜崇の童兒 ◇

(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
星・太陽の暦と話	古事記・萬葉集・明治天皇の御製	孔子・釋迦・人義・吳鳳	セクスピアとリヤ王物語	僧禪海・陶工柿右衛門・岩松助左衛門	アレクサンドル大王とベートベン

◇兒童の訓育に重きをおき興味に據つて兒童の◇
◇神精向上を計り全保を得られるは本叢書である◇

四六版・各篇貳百六十頁・挿畫數葉・三色版口繪入
錢八十料送留書　錢十七圓壹金價定　冊各　裝美入綴

出口競先生編

◆好評激甚◆注文殺到◆

全國校歌・寮歌・應援歌と其の解說

最新刊

陸に水に對抗爭覇のシーズン
野球！蹴球！ボートレースに
あらゆる運動に諸君雄飛活躍の時
運動競技の勝敗は意氣にあり
意氣の向上と興味の增伸は
校歌・寮歌 應援歌にあり

全國中等學校專門學校及び高等學校の校歌と寮歌應援歌を集め著名な代表作には音譜を挿入れ尙歌の起源と註釋を附し興味津々、學生諸君やスポーツマンの必携書である

音譜入
四六版裝幀美
貳百頁函入
金壹圓參拾錢
送料十三錢

児乙部25-E-3
1200600483160